

現代社会と若者たちを活性化する15のキーワード

# 「社会貢献」

# 2

逮捕直前に「カネもうけは悪いことですか」と問いかけた人がいる。だが、現実には営利を追求する企業でも、CSR（コーポレート・ソーシャル・レスポンスビリティ）として社会的責任が問われる時代になった。これを無視する企業は短期的な利益を得られなくても、持続することは許されない。個人の幸福もまさに同じことであり、社会に貢献することで自らを豊かにできる。明治維新直後に米国に留学した4人の若者も同じように考えた。だからこそ仕事を持ちながらも、学校を創設したのである。

## 海外留学経験の エリートたちが開校した 夜学の専修学校

「なぜ就職しなければならぬのか」  
こう考える大学生は、決して少なくない。昔は就職しなければ生活できなかったから、そんなことを考える余裕はなかった。ところが社会全体が豊かになったせいか、就職しなくても生きていくことはできる。その象徴が「ニート」と呼ばれる無業者である。

だから、この問いかけに「カネを稼ぐため」という答えは通用しない。唯一のヒントは、働く必要のない資産家でも仕事を続ける人が少なくないことだ。責任ある仕事は、報酬だけでなく、笑顔や感謝、そして満足につながる。そうした社会とのやり取りや貢献が、仕事の本質といっているのではないだろうか。  
明治維新直後にアメリカに留学した



学長 日高 義博

代も、こうした明治期と大きく変わるものではない。法整備のスキをついて大金を稼いで逮捕された人たちが典型的であり、金融機関での横領事件も頻発している。このような道徳や倫理の衰退は、おそらく武士階級が消滅した明治期にもあったに違いない。だが、創立者らはそうした風潮に負けず、自分の時間と財産を削つても、優秀な人材を育成することが社会を豊かにすると信じたのである。

私たちは突然に現代に生まれたわけではない。このように崇高な理念を持つ人たちの絶えざる社会貢献によって、今が存在する。何もボランティアだけでなく、企業活動だって社会貢献になり得る。そんな視点を持ってない「何でもあり」の社会は、私たちを確実に不幸にするのである。

## 法律と経済を 日本語で教える初の学校

留学した4人の若者によって設立された専修学校は、法学と経済学を日本語で教授するとともに、実学を重

4人の若者が、1880年に専修大学の前身である専修学校を設立したのも、その本質に変わりはない。国費や藩費によって派遣された彼らは、紛れもないトップエリートだった。明治という新しい時代のリーダーになる責任はあつても、学校をつくることまでは求められていない。実際に彼らは司法省や大蔵省などの官僚となつて社会を動かしていったのだが、個人の利得だけ考えれば、学校運営、ましてや講義まで行うのは割にあつたことではないはずだ。

「創立者の一人、相馬永胤は司法省の判事などを経て横浜正金銀行の頭取になつたのですが、横浜から神田の校舎まで毎日、馬車で通つたといわれています。創立者は全て官僚になりましたから、その本業を妨げないように夜学



最初の教室は京橋区木挽町の明治会堂別館に置かれた。松斎吟光画「明治会堂之図」(明治14年)

法律を教えるのは、この専修学校が初めてであり、経済学を教える学校もそれまで日本にはなかった。どちらも欧米が先行していた分野だけに、日本語で教えるためには訳語が必要となる。

このため専修学校で作られた法律、経済系の専門用語は数多い。中でも最も普及したのは「計理」である。今では「経理」というが、「計理の専修」と呼ばれた時期も長く、税理士・公認会計士を数多く輩出してきた。

視する日本初の私学だった。  
当時、東京で法学を教える専門学校は東京大学法学部と司法省の法学校だけで、東大は英語で英米法を、司法省法学校ではフランス語でフランスの法律を教えていた。日本語によって



専務理事 三島 英雄

この3つの重大な危機から専修大学を救つたのは「何よりも卒業生や学生、教員と職員の愛校心です」と専修大学・出生正芳理事長は語る。「社会貢献」に続いて「愛校心」。時代錯誤と嘲笑するのも結構だが、今どき、愛校心を持つる大学がどれだけあるだろうと思ふのである。



理事長 出牛 正芳

「維新前には幕府側と官軍として互いに刃を交えたこともある4人ですが、米国に派遣され、乏しい学費の中で勉強を続けていくうちに友情が芽生えたのでしょう。それが、やがて学校を設立

でスタートしたものでありましょう」(専修大学・三島英雄専務理事)  
優秀な人材の育成こそが  
社会を豊かにする

するということに高まってきたのです」(専修大学・日高義博学長)  
乏しい予算をやりくりして自分たちを海外に送り出してくれた国や藩への感謝はもちろんだが、それを広く社会に還元し、自分たちの死後も持続的に貢献する方法として、学校設立を考えたとのである。

明治は幕末から近代社会に移行した時代だが、こうした転換期には利に目ざとい連中が跳梁跋扈する。明治政府も内実は藩閥の支配下にあり、横領まがいの国費流用も頻繁だつたといわれている。  
規制緩和で「何でもあり」となつた現

## 残つたのは 図書館の壁1枚 —関東大震災からの復興



外壁1枚を残して  
崩れ落ちた図書館書庫

現在のような大学制度が法的に整つたのは1918年(大正7年)の大学令の公布からである。この頃、専修大学は「私立専修大学」と呼称していたが、法的には専門学校であり、大学としての認可を目指して、急ピッチでキャンパスの拡充整備を進めることになった。図書館や、木造3階建ての校舎などが相次いで竣工。こうした努力がまつて、1922年(大正11年)5月には晴れて大学としての認可を受けることができた。

だがその翌年、全てが一瞬のうちに崩れ落ちてしまった。1923年(大正12年)9月1日、午前11時58分に相模灘沖を震源とする関東大震災が首都圏を襲つたのである。営々と築き上げてきた一切が瞬時に失われ、かろうじて残つたのは、図書館倉庫の壁1枚だった。すべてが崩壊しただけでなく、校舎建築などの負債も背負つていかねばならない。

呆然と立ちつくす大学関係者の胸を熱くしたのは、後日、誰が言うともなく集まり、瓦礫を片付け始めた学生たちだつたといふ。被災を免れた学生たちは、まず家族の安否を確認し、次に大学のことを想つたのである。

すでに創立者の2人は他界しており、高齢の相馬永胤が復興に奔走することになった。早稲田の自宅に臨時の仮事務所を設けるとともに、立教大学の厚意で教室を借りて授業を再開。仮校舎も新設した。この激務と心労が老体にひびいたせいか、相馬は翌年1月26日に死去。創立者でただ一人残つた目賀田種太郎も、1926年(大正15年)にこの世を去る。

しかし、彼らの遺志は後進が引き継ぎ、やがて新校舎が再建され、校旗・校歌も生まれた。壁1枚からの再出発を支えた熱い想いがその中に込められているのである。